

「深く考える」授業の創造

(3年計画の3年目)

研究主任 高杉 廣張

1. 研究主題設定の理由

現代の情報伝達技術の発展は、私たちが必要とする様々な情報をいつでも、どこでも手に入れることができるようにした。それだけでなく、自分の考えを容易に発信できるようにもした。こうして、私たちの生きるコミュニティは世界的規模にまで広がり、様々な知識や情報、価値観をもつ人々とつながることを可能にしている。いつでも、どこでも、誰とでもつながることを可能にした社会では、日々、知識や情報、価値観は更新され、私たちの周囲には様々な知識や情報、価値観があふれている。このように変化の激しい社会においては、既存の知識や情報、価値観だけを当てはめて解決できるような課題ばかりではないであろう。状況に応じて、既存の知識や情報をもとにして、修正して活用したり、関連付けてまとめたり、足りない知識を補ったりするなど、新たな知識や価値を創造していく力が求められている。

このように変化の激しい社会情勢の中、学校教育においてどのようなことができるであろうか。既存の知識や情報を当てはめて解決できるような学習ばかりでは、これからの社会に対応できない。既存の知識や情報をもとにして修正したり、いくつかの知識や情報を関連付けたり、補ったりなどして、状況に応じた解決を図っていくような学習が求められていると考える。すなわち、「何を知っているか」で完結するような学習から、既存の知識や情報を活用して「何ができるか」「どのような解決ができるのか」を創造的に考える学習への転換が迫られていると言えるのではないだろうか。

生徒には、課題を解決するにあたって、既習事項やそのときに得られた知識や情報に対し、「確かなものなのか」「本当に十分なのか」「足りないものはいいのか」と吟味しようとする姿勢をもってほしいと考える。例えば、それらと関わりのある事柄に目を向けて、相互の関係を捉えようとしたり、全体構造の中の知識や情報の位置づけをつかもうとしたりすることなどである。中学校段階では、そのような全体構造について、根拠を明らかにして理論的に理解することは難しい場合もあるが、生徒にそのような姿勢をもたせようということは重要なことである。

生徒は授業の中でどのような学習プロセスを経るのだろうか。生徒は課題に直面したとき、解決に向けて見直しをもったり、試行錯誤したりしながら、ある結論に到達する。場合によっては直観的に到達することもあるだろう。この時得られた結論は、度合いの違いこそあれ、その生徒にとってはある程度納得しうるものであると考えられる。そのような結論を「自分なりの結論」と呼ぶこととするが、生徒は納得しうる結論に到達したことで課題は解決したと考え、学習はそこで終わるのである。本研究で目指すのは、生徒が「自分なりの結論」に到達したあと、そこにとどまらず、学習をその先へと進めようとするすることである。そこで重視するのが、「自分なりの結論」を吟味して、それを改善したり、発展させたりするプロセスである。このようなプロセスのある授業を「深く考える」授業と呼ぶこととする。「『深く考える』授業の創造」を研究主題とし、すべての教科で実践を積み重ねていきたい。

しかし、「自分なりの結論」に到達した生徒が、それを吟味し、改善したり、発展させたりすることは、知識や情報の再構成を伴うため容易ではないだろう。その生徒は「自分なりの結論」を改めて吟味する必要性を感じない場合が多いからである。「深く考える」授業を実現するためには、この状況を打開する必要があると考える。

2. 「深く考える」授業を実現するための手立て

「深く考える」授業では、生徒が「自分なりの結論」に到達して、学習がとどまってしまっている状態を打破し、学習をさらに進めるための手立てが必要となる。その手立てによって、生徒が「自分なりの結論」が本当にそれでよいのか、それで十分なのかと、吟味するように仕組むのである。そのためには、生徒がどのような時に吟味し始めるのかを考え、工夫しなければならない。

例えば、仲間の意見や考えなどを知り、自分のものとの差異を感じた場合、その差異を何とかして解消したいという思いが生まれ、自分の意見や考えなどを見直そう、考え直そうとするだろう。また、矛盾を見つける、疑問をもつ、違和感を抱くようなときにも、生徒はそうするようになると思う。それだけでなく、仲間が発表したものなどに感動したり、驚いたりしたときにも、生徒は自分の意見や考えなどを見直そう、考え直そうとするように思う。

本研究では、「深く考える」授業に必要な、「自分なりの結論」を吟味するよう促す手立ての一つとして、「視点を変える」活動と呼ぶ手立てを授業の中に意図的に取り入れることとした。「自分なりの結論」は、生徒のもつ知識や情報、価値観などから生み出されるものだと考える。したがって、生徒がもつ知識や情報、価値

観などをふまえながらも、それらを打ちこわしたり、再編したりするような視点を新たに与えることが重要だろう。そうすることによって、前述したような、差異や矛盾、疑問、違和感、感動、驚きなどを生徒の内面に生み出すことができると考えた。

「視点を変える」活動には、さまざまな特徴がある。例えば、「自分なりの結論」がものごとの一部分のみにこだわって導き出されている場合が考えられる。その時に、ものごとを全体的に捉え直すことで生徒の視点が変わり、「自分なりの結論」を吟味して、それを改善したり、発展させたりするきっかけになることがある。逆に、ものごとの全体像を大まかに見て結論が導き出された時に、一部分に焦点を当てて捉え直すことで生徒の視点が変わることもあり得る。また、ものごとを異なる立場（観点、基準、価値観など）から捉え直すことによって、生徒の視点が変わることも考えられるだろう。

なお、ここにあげた三つの特徴は、教科の特性や学習場面によって、一つの「視点を変える」活動に、複数の特徴が含まれることも想定している。

3. 研究内容

本研究は3年計画で進めてきた。生徒は将来、状況に応じて、既存の知識や情報をもとにして、修正して活用したり、関連付けてまとめたり、足りない知識を補ったりするなど、新たな知識や価値を創造していく力を身につけていく必要があると考える。そのためには、「自分なりの結論」を、本当にそれで良いのか、それで十分なのかと吟味する経験を、長い時間をかけて積み重ねていかなければならないだろう。中学校段階では、すべての教科で、可能な限り多くの「深く考える」授業を構成し、実践することとしたい。3年間の研究は、次のように進めてきた。

研究初年度は、本研究主題でもある「深く考える」授業について規定し、それを実現するための手立てを明らかにすることを目的として研究を進めてきた。生徒が「深く考える」ためには、自分自身の考えについて見つめ直す機会をつくることが重要だと考え、『自分自身を俯瞰する』活動を手立てとして授業に取り入れることとした。事前研究会や公開研究会において、授業に『自分自身を俯瞰する』活動を具体的に取り入れ実践をしてきた。実践を通して、『自分自身を俯瞰する』活動には、ものごとの全体を見たり、一部を見たり、立場を変えて見たりなど、いくつかの特徴が見いだされた。

研究の2年目は、引き続き、「深く考える」授業の規定とそのための手立てについて明らかにすることを目的とした。『自分自身を俯瞰する』活動に見られたいくつかの特徴を全て含める意味で「視点を変える」活動と表現を改めた。事前研究会や公開研究会では、各教科で「深く考える」授業をどのように捉え、どのような「視点を変える」活動を取り入れたのかを明らかにした上で実践を行った。実践した授業記録を基に、授業の実際について、具体的な生徒の姿などにも触れながら、教科ごとに整理し、考察を加えた。

研究3年目は、引き続き実践を積み重ねていくとともに、3年間の実践研究の成果から、「深く考える」授業を実現するための手立てとして「視点を変える」活動の有効性を各教科で明らかにすることを目的とした。また、生徒が「自分なりの結論」を吟味するようになり、実践した授業が本研究のいう「深く考える」授業となっていたのかについてもまとめていくことを目指した。

4. 本年度の研究について

◆（参考）「視点を変える」活動の実践例（2年目の研究より）

「視点を変える」活動としては、資料やモデルの提示、仲間との交流、タブレット端末を用いた振り返りなどが挙げられる。今年度はその有効性を明らかにすることを目指すが、活動事例として、昨年度の実践を紹介したい。

社会科では「国風文化」についての授業を行い、「視点を変える」活動として、新たな資料の提示を行うこととした。生徒は「国風文化」を「唐の影響を受けずに栄えた日本独自の文化」として捉えがちである。しかし、実際には「国風文化」とは「唐が崩壊したため、宋から流入してきた文物の影響を受けつつ栄えた日本独自の文化」と考えられる。生徒が「国風文化」について後者のように捉えるようになることをねらいとした。この授業を構成するにあたってさまざまな配慮や工夫をした。まず題材として「源氏物語」を取り上げたことである。「源氏物語」は、生徒にとって中国の影響を受けずに栄えた日本独自の文化の象徴とも呼べる作品である。これにより、生徒の誤った解釈が顕在化することになる。また、この授業を行うまでに日本と東アジアとの関係について丁寧な扱ってきている。生徒が「国風文化」に対して唐の影響を考えられる素地を培うためである。「視点を変える」活動としては、「源氏物語」が確かに唐の影響を受けていることを示す「法苑珠林」という資料を提示した。「国風文化」を唐の影響を受けずに栄えた日本独自の文化と捉えていた生徒に、「国風文化」についての解釈を正しく捉え直す機会を与えるものとなると思った。

国語科では、「視点を変える」活動として、自分の考えを考え直そうとする契機をつくるために他者との対話活動（仲間との交流）を授業の中に積極的に取り入れている。生徒が主体的に交流を行うことができるように、生徒の気づきをもとに学習課題を設定した。具体的には、読むことの授業において、生徒の気づき（初読

の感想)を共感・疑問・批判・表現の観点を意識させ記録し、それを全体で共有する中で、生徒1人1人の中に課題意識をもたせた。それにより、生徒の中に学習課題に対する自己決定感が生まれ、主体的に学習に取り組むようになった。また交流活動を通して課題を解決することにより、交流することの有用感を実感することができ、交流活動に積極的に取り組むようになった。もちろん、学習課題の設定すべてを生徒の気づきだけに任せてしまうのではない。生徒の実態に合わせて教師の考えた身に付けさせたい力と生徒の気づきのずれを、教師が整理し、学習課題を設定しようとしている。「故郷」(3年)の授業では、登場人物の年表を作るという活動を入れることで、生徒が自分たちで、解決すべき課題に気づくことができるように工夫を行った。

保健体育科においては、タブレット端末を用いた「視点を変える」活動を取り入れて授業を構成した。生徒は跳び箱の技を選び、発表会にむけて練習を行った。生徒はタブレット端末を用いながら、自分の選んだ技がよりよくできるためのポイントや改善点を探していく。タブレット端末を用いることで、生徒は自分自身や仲間の動きを視覚的に捉えて、比較することができる。また、映像を用いながら自分自身を振り返ったり、他者とアドバイスしあったりする場を設けることで、改善を図ることができると考えた。それに加えて今回は、授業におけるお互いの気づきを全体で共有する時間においてもタブレット端末を用いた。生徒は、実際の映像から仲間がどのようなことに気づいたのかを知ることで、生徒は自分自身の動きについて振り返っているようであった。また、タブレット端末で撮影した動画を視覚的な資料として用いて解説することで、具体的な視点や気づかせたい部分など、授業者のねらいに生徒を近づけられる効果があったと感じた。

◆「深く考える」授業づくりに必要となる要素(「視点を変える」活動に関わって)

本研究では、これまで「深く考える」授業を実現するための手立ての一つとして「視点を変える」活動を中心に据え、実践を積み重ねてきた。3年目はその「視点を変える」活動の有効性を検証することを目的に研究を進めるが、これまでの研究から、「深く考える」授業づくりには下記に挙げるような要素も欠かせないと考えた。いずれも、授業を構成する要素として当然考えるべきものではある。しかし、授業者がこれらについてどれだけ考え、意図的に準備できたのかが「深く考える」授業づくりに大きく作用すると考える。

ア)「視点を変える」活動を効果的にする教師のはたらきかけ

「深く考える」授業には、「視点を変える」活動を取り入れることとしているが、そうした活動を取り入れるだけでは十分とは言えないだろう。「視点を変える」活動の前後には活動を促すことに関連するさまざまな手立てが必要となり、授業者は前もってそれらについて考えておく必要があるだろう。例えば、

- ・どのように題材を提示するのか？
- ・どのようなモデルを示すのか？
- ・どのような発問をするのか？
- ・生徒の発言に対し、どう問い返すのか？
- ・生徒の発言をどう結びつけていくのか？
- ・どのような資料を投入するのか？

などである。活動が効果的なものになるよう布石としてうつ手立てがあれば、効果をさらに強めるための手立てでもある。どのような手立てを講じるのかは、題材、教材、学習課題によって違ってくるものであろうし、生徒によっても異なるものとなるだろう。だからこそ、「深く考える」授業をどのように考え、どのように実現させようとしているのかという授業者の意図が大きく見える部分でもあると考える。

イ)「深く考える」授業のための題材、教材、学習課題の検討

「深く考える」授業においては、生徒が「自分なりの結論」を吟味するように仕組む必要があり、そのために「視点を変える」活動を入れるのである。生徒の実態を考慮し、生徒が「自分なりの結論」に到達した時点でとどまることなく、それを吟味することにつながると予測できるような題材、教材、学習課題について、教師は検討しておかなければならない。題材、教材、学習課題は「視点を変える」活動やその活動を効果的にする教師のはたらきかけと大きく関連するものであり、「深く考える」授業づくりに関して基盤となるものだと考える。

◆『「深く考える」授業』の検証

「視点を変える」活動を含めた生徒の学習プロセスが、本研究で目指す「深く考える」授業の実現につながるものとなっていたのかを検証する必要がある。「深く考える」授業のための題材、教材、学習課題などが「視点を変える」活動やその活動を効果的にする教師のはたらきかけとどのように関わっていたのかについても検証の中で明らかになってくるだろう。

授業が「深く考える」授業となっていたのかどうかは、生徒の姿を通して分析する必要がある。そのためには、まず、生徒の考えをアウトプットさせ、生徒の学習過程を記録したり、成果物としての作品などを残したりしておくことが大切である。そのようにして集積したものを分析するには規準が必要となろう。そこで授業者が「深く考える」授業において、生徒はどのような姿を見せると考えているのか、また、どのような生徒の

姿を期待しているのかを、具体的に示しておくこととした。規準をどのような形で示すのかは教科の特性と大きく関わると思われるため、各教科でよりよい形を検討する。さらに、「視点を変える」活動やその活動を効果的にする教師のはたらきかけと、集積したものから見えてきた生徒の姿との関連性に言及しつつ、考察を加えていきたい。

「深く考える」授業において「自分なりの結論」を吟味し、改善したり、発展させたりする経験を積み重ねることで、生徒が課題を解決するにあたって、既習事項やそのときに得られた知識や情報に対し、「確かなものなのか」「本当に十分なのか」「足りないものはないのか」と吟味しようとする姿勢をもつようになることを期待している。本研究の授業を受けてきた期間の差や生徒の発達段階による差などを踏まえつつ、規準と照らし合わせながら生徒の姿を分析し、可能な限り生徒の変容にまで触れながら3年間の研究を総括する。

5. 本年度の校内研究経過

第1回 校内研	4月 5日 (火)	研究の概要説明, 授業づくりの視点の提案
第1回 教科研	4月 5日 (火)	教科研究内容等の検討
第2回 校内研	5月 2日 (月)	授業研究会の指導案検討, 授業づくりの視点の確認
第3回 校内研	5月 13日 (金)	授業研究会 (櫻井指導主事を招聘しての師範授業)
第4回 校内研	5月 30日 (月)	事前研究会にむけて
第2回 教科研	6月 6日 (月)	事前研究会にむけて
〈 5月31日 (火) ~ 6月20日 (月) までの間で 第1回共同研究会)		
第1回 事前研	7月 1日 (金)	全9教科で授業を提案, 協議
第5回 校内研	7月 21日 (木)	夏季校内研① 第1回事前研の授業報告会
第7回 校内研	8月 18日 (木)	夏季校内研③ 全体研究総論について。 教育課程還流報告, 研究視察報告
〈 7月 4日 (月) ~ 8月 9日 (火) までの間で 第2回共同研究会)		
第2回 事前研	8月 23日 (火)	公開研究会の指導案検討
第8回 校内研	9月 12日 (月)	公開研究会にむけて
〈 8月24日 (水) ~ 9月14日 (水) までの間で 第3回共同研究会)		
第9回 校内研	9月 23日 (金)	公開研究会の最終確認 ※職員会議内
中等教育研究会	10月 1日 (土)	全9教科で授業を提案, 協議
第10回 校内研	11月 2日 (水)	研究のまとめ
第3回 教科研	11月 14日 (月)	教科研究のまとめ
第11回 校内研	12月 5日 (月)	研究のまとめ, 来年度の研究にむけて
第12回 校内研	1月 13日 (金)	研究のまとめ, 来年度の研究にむけて
第4回 教科研	1月 30日 (月)	来年度の研究にむけて
第13回 校内研	3月 3日 (金)	来年度の研究にむけて

◆第1回事前研究会

- ① 日時 7月1日 (金) 13:30-16:30
- ② 流れ 全体会 13:30-14:00
研究授業 14:10-15:00
各教科分科会 15:10-16:30
- ③ 内容 全体研究総論の提案, 各教科研究総論の検討, 授業提案および協議

◆第2回事前研究会

- ① 日時 8月23日 (水) 14:30-16:30
- ② 流れ 分科会 14:30-16:30
- ③ 内容 ・全体研究総論の再提案,
・各教科研究総論の再提案, 公開研究会指導案の検討

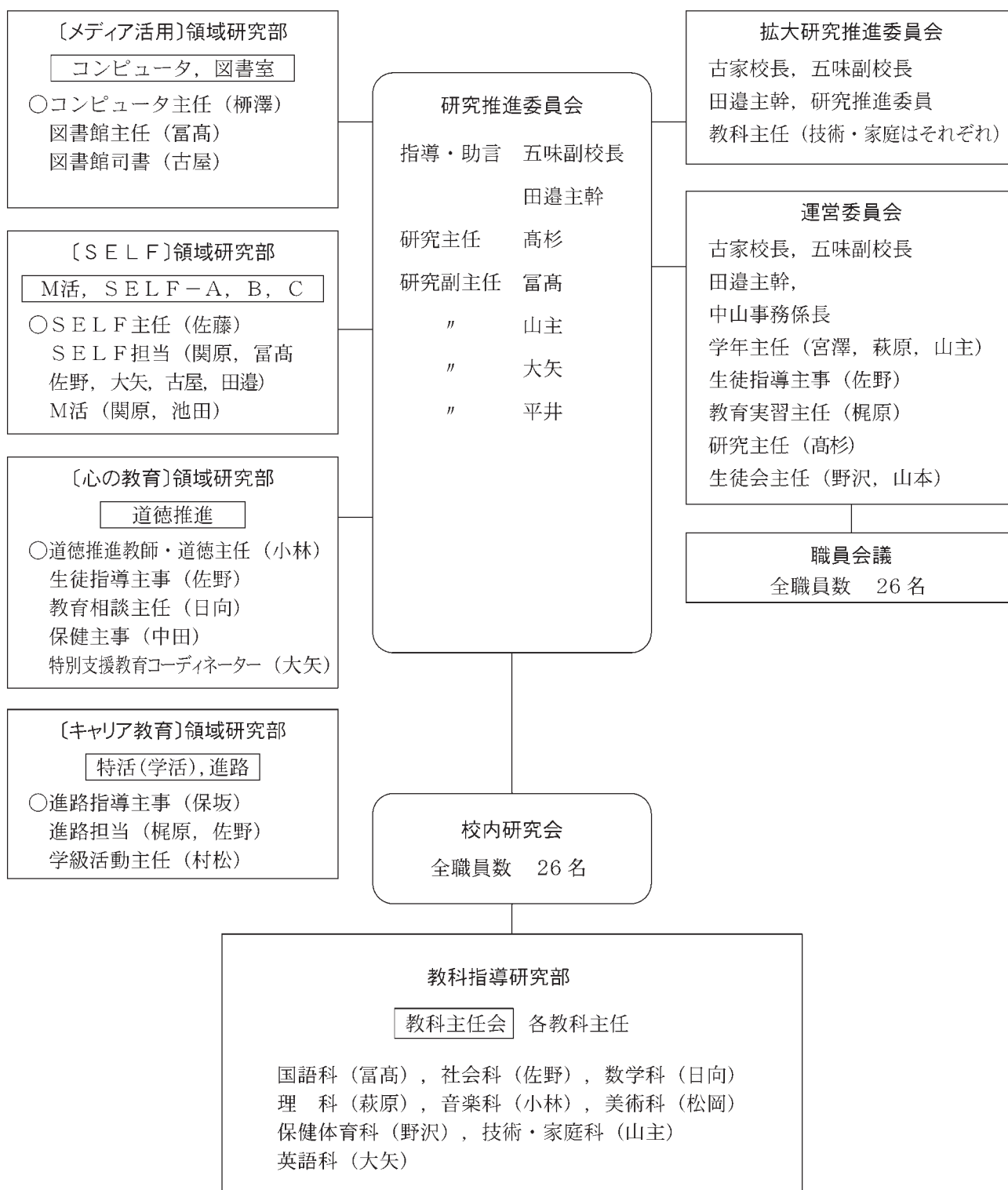
◆中等教育研究会

- ① 日時 10月1日(土) 8:50-16:00
 ② 時程 8:20- 8:45 受付(公開授業Ⅰに参加される方)
 8:50- 9:40 公開授業Ⅰ 国語①・数学①
 9:30- 9:55 受付(公開授業Ⅱに参加される方)
 10:00-10:50 公開授業Ⅱ
 国語②・社会・数学②・理科・音楽・美術・保健体育
 技術・家庭・英語
 11:10-12:40 分科会
 12:50-13:30 昼食・休憩
 13:40-14:20 全体会
 14:30-16:00 講演会
 十文字学園女子大学教授(前文部科学省教科調査官)
 富山哲也先生
 「予測困難な時代を生きる子供たちのために
 ～これからの授業づくりを考える～」

③授業者および会場

教科	教科主任	授業者	授業学級	授業会場
国語科	富高 勇樹	富高 勇樹	1-1	図書室
		平井 規夫	2-3	
社会科	佐野 愛	梶原 隆一	1-2	1-2 教室
数学科	日向 昭子	井上 透	3-1	3-1 教室
		日向 昭子	1-4	1-4 教室
理科	萩原 修	宮澤 和孝	3-2	第1理科室
音楽科	小林 美佳	小林 美佳	3-4	第1音楽室
美術科	松岡あすみ	松岡あすみ	1-3	美術室
保健体育科	野沢 克美	村松 裕太	2-2	桐華館
技術科	山主 公彦	山主 公彦	2-4	第2コンピュータ室
家庭科		山本 裕子	2-1	2-1 教室
英語科	大矢 裕子	大矢 裕子	3-3	3-3 教室

6. 本年度の校内研究組織



7. これまでの研究のまとめ（成果と課題）

◆「視点を変える」活動の有効性について

本研究では「視点を変える」活動を「深く考える」授業を実現させるための手立ての一つとして位置づけ、研究最終年次である今年度は、その有効性を探ってきた。「視点を変える」活動としては、他者との交流、資料の提示、モデルの提示、タブレット端末による振り返りなど、さまざまな実践を行ってきた。その中でも他者との交流を「視点を変える」活動として取り入れた教科が多かった。

ペアやグループの形態で他者と交流をしたからといって、常に生徒が新たな視点を得られるわけではない。それは生徒がもともと持っている知識や、見方・考え方などは違うからである。それゆえに、どのタイミングで何をきっかけにして変化が見られるようになるのかは生徒によって異なる。そのことをふまえた上で、さまざまなはたらきかけを講じてきた。例えば、生徒たちの活動が停滞してしまうような場合には、資料やモデルの提示、アドバイスや問い返しなど、教師が新たな視点を与えることで停滞した状態を打開してきた。また、話し合いをするにしても、個人で考える時間を確保することで、意見が整理され、考えが深まる様子が見られた。

やはり教師が活動にどう関わるのかを考えておくことが重要なのである。生徒それぞれの意見を全体で共有するような場合には、その意見を整理し、討論がスムーズに行われるような教師のはたらきかけが必要である。また、教師が生徒にゆだねる部分と支援する部分を見極め、タイミングを計ってはたらきかけることも求められる。実際に、意見の交流を生徒にゆだねた結果、論点がずれてしまったり、感想の交流にとどまってしまったりする様子が見られた。個人での活動がよいのか、ペアやグループでの活動がよいのか、また活動の時間配分やタイミングなどは、そのときに生徒がおかれた状況によって変わるであろうし、生徒個々の発達段階とも関わりと考えられる。目の前にいる生徒を均質な学習集団として捉えることなく、個人差も考慮していかなければならない。

本研究では「視点を変える」活動自体をどのように仕組むのか、教師がその活動にどう関わるのかだけでなく、題材、教材、学習課題などの設定についてもあわせて考えてきた。「視点を変える」活動をきっかけとして、生徒が「自分なりの結論」を吟味するようになるためには、まず生徒が自然に、そして主体的に関わり考えたいような題材等の工夫が必要であった。

例えば、音楽科は長唄の授業実践を行ったが、前年度に三味線の基礎を学んでいたため、すんなりと学習に入っていくことができたようである。このように生徒の学習経験を考慮することで、新たな学習であっても、生徒は主体性を失わずに授業に参加することができる。また、過去の学習が今の学習とつながっていると実感することで、生徒は学習の深まりを感じられる。国語科では単元の学習課題を設定する際、解決すべき課題を全体交流で決定し、何のために学習に取り組んでいくのかという意識を高める活動を取り入れた。そうすることで、生徒は学習に見通しをもち、課題は「与えられるもの」ではなく、「主体的に関わり、取り組むもの」として捉えていた。そのほかにも、数学科では、学習が生徒の生活経験と結びつくよう、具体物を用いて題材を提示した。そうすることで、生徒に興味をもたせ、自然と考えたいように仕組むことができた。

このようにして取り組んできた「視点を変える」活動の有効性について、各教科研究では以下のように述べている。

- ・他者の演奏を聴いて感じたことが、自分の演奏に生かされたり、意見をもらうことで新たな可能性に気づいたり大きな効果を得ることができる。
- ・他者との交流や知識の活用、他の作品との比較などを行うことで見方が広がり、より深く作品に迫ることができていた。
- ・もともとなかった考えを新たに取り入れ、活用していくことは、生徒の興味関心につながった。
- ・実践する視点によって製作物は大きく変わり、改善されていった。
- ・他者のコメント、他者の作品や表現との比較などを通して、振り返りをする機会を設けることで生徒自身に変容をもたらすことにつながった。

このように、「視点を変える」活動によって、異なる視点を与えることができ、生徒は多面的・多角的にさまざまな見方や考え方ものごとを捉えられるようになった。そのことが「自分なりの結論」を吟味し、改善したり、発展させたりしようとする生徒の姿勢につながり、「深く考える」授業の学習過程を生み出すことにつながったと言える。一度の「視点を変える」活動で、上述したような変化がすべての生徒に見られたわけではない。さまざまなアプローチで、繰り返し、継続的に取り組んでいく必要がある。「視点を変える」活動を「何のために」行い、生徒がどうなることを目指すのか、教師がそれを明確にしておくことが重要だと強く感じた。私たちは授業で目指すものから逆算して、教材研究や生徒の実態把握を丁寧に行い、長期的な見通しをもって学習をデザインすることを心がけてきた。それは間違いなく、私たち教師の授業をコーディネートする力の向上につながったはずである。

◆研究主題「『深く考える』授業の創造」について

実践した授業が「深く考える」授業となっていたのかを検証するには、生徒の姿をもとに授業を評価し、振り返りをしていく必要があった。最終年次には、県教育委員会より指導主事を招聘し、授業研究会を開催し、ルーブリックを用いた評価などについて学習する機会をもった。その後、校内で検討を重ねた結果、指導案の中に「本時の授業で期待する生徒の姿」と「そのような生徒の姿を引き出すための手立て」を明示し、実際に期待する生徒の姿が見られたのか、そのために設定した手立てが有効であったのかを振り返ることとし、全教科で共通した取組として実践した。

生徒の姿を見とるための方法としては、事前（事後）調査、アンケート、ノートやワークシート、ポートフォリオなどへの記述などがあげられる。ノートやワークシートなどに自らの思考過程を記述させることで、結論にいたるまでのプロセスを可視化できるように工夫した。これまでもさまざまな教科で、授業で大切だと思ったところや心に残ったことなどを授業感想のように記述させてきたが、さらに考察を行なわせたり、自分の記述を書き直させたりすることにも取り組んだ。このようにアウトプットすることで、生徒は自分の考えや意見などを整理することができ、メタ認知できるという利点もある。

社会科では生徒がノートなどに記述したものを通信に掲載して見合い、仲間から学ぶ機会を設定していた。そうして他者の考察にふれることで、自分の考え方を問い直すことにつながった。また、国語科ではポートフォリオなどの記述による「振り返り」を通して、学習を通して得られたものの意味や価値を明確に言語化させていた。そうすることで、自分ができるようになったことと、これからの課題を明確にできるだけでなく、生徒に自己有用感を感じさせたり、次の学習への動機付けにつながりたりする点で有効であったとまとめている。

生徒の内面をどのようにアウトプットさせるのか、それをどのように見とるのか。これは教師が直面している大きな課題の一つであろう。本校の実践が、課題解決の一助となることを期待したい。もちろん、生徒自身が内面で起きている変化をありのままに記述することは難しく、そうするには普段から継続した訓練が必要であり、時には教科を越えた取組を行っていくことも必要である。

3年間の研究を通して、研究主題である「『深く考える』授業の創造」にせまるべく、事前研究会や公開研究会、あわせて65本の授業実践と研究協議を重ねてきた。それに加え、普段から「深く考える」授業を意識した実践を行うことで、生徒は「自分なりの結論」を吟味し、改善したり、発展させたりする経験を積み重ねてきた。各教科研究のまとめでは、「深く考える」授業によって以下のような生徒の様子が見られるようになったと述べている。

- ・物事を俯瞰したり多角的・多面的な社会的な見方・考え方を意識する習慣が身に付き、考察の質があがった。
- ・自分の考えを再評価し、確証を得たり、改善や発展を図ったりすることができた。
- ・なぜこうなるのかを突き詰めていくような姿勢が、日常で見られるようになった。
- ・よりよいものを目指して試行錯誤する姿勢を育てることにつながった。
- ・情報をまとめたり、相手に分かりやすく伝えたりする場面で、試行錯誤しながら考えていた。
- ・より良い解決方法を仲間と協働的に探ろうとする姿勢や学習方法が身についてきた。
- ・自分が表現したものの不十分な部分や改善できる部分について、どうしたらよりよい表現にバージョンアップができるのかを考えていた。

このような生徒の様子は、まさしく本研究が目指すものであり、研究の結果であり成果である。本研究では、生徒が課題を解決するにあたって、既習事項やそのときに得られた知識や情報に対し、「確かなのか」「本当に十分なのか」「足りないものはいいのか」と吟味しようとする姿勢をもつようになることを期待してきた。そのためには、やはり普段から「深く考える」授業を継続して行うこと、そのような授業に参加する機会を増やすことが重要であった。「深く考える」授業は意図的につくられるものであり、多くの時間や労力が必要となる。しかし、継続することで、はじめは教師主導で進められていた「深く考える」授業における学習プロセスが次第に習慣化され、生徒が主体的に進めるものとして定着してきている。その点で、本研究は生徒に還元される価値のあるものだったと言える。

教科研究を中心に据えて3年間の研究を進めてきたが、今後は各教科での学習にとどまらず、教科の枠を越えた取組を増やしていくことで、生徒の力をさらに高めていきたい。他にも「深く考える」授業を成立させる要素として、どんな意見も大切にされるという教室の雰囲気也不可欠である。安心して自分の考えなどを表出することができる人間関係や、他者の意見を受容し、たとえ自分とは異なる意見であったとしても、それを認めることができる態度は必要である。授業規律の確立や、学習集団としての質を高めることなど、学級づくりの視点をもちながら研究を進めていくことも忘れてはならない。

今後、視点を変えてものごとを捉え直してみることや、自分の見方や考え方がこれでよいのかと考え直すことの価値や重要性を生徒が実感できるような実践を積み重ねていきたい。そして、それが将来、生徒に必要な力をつけることにつながると期待してまとめたい。

資料1) 指導助言者・共同研究者・研究協力員一覧

教科	指導助言者 (県教育委員会・県総合教育センター)		研究協力員	
	共同研究者 (山梨大学)			
国語	県教育委員会 指導主事	望月 陵	斐崎東中学校	高左右美穂子
	県教育センター 主査・指導主事	田邊 秀樹	西中学校	加藤 克人
	山梨大学大学院 教授	岩永 正史	甲府第一高等学校	秋山 尚克
	山梨大学大学院 准教授	齊藤 知也	春日居中学校	嶋田 拓郎
社会	県教育委員会 指導主事	佐藤 雄二	附属小学校	長田 雅基
	県教育センター 研修指導部部長	長田 英和	都留第二中学校	若尾 大樹
	山梨大学大学院 教授	服部 一秀	上条中学校	中田 敦
	山梨大学大学院 准教授	後藤賢次郎	南部中学校	雨宮 文
	山梨大学大学院 客員教授	堀之内睦男	東中学校	奥田 陽介
数学	県教育委員会 指導主事	櫻井 順矢	都留第二中学校	古川明日香
	県教育センター 主査・指導主事	雨宮 友成	附属小学校	阿部伸之介
	山梨大学大学院 教授	中村 享史	下吉田東小学校	石川 哲也
	山梨大学大学院 准教授	清水 宏幸	北西中学校	茅野 賢一
理科	県教育委員会 指導主事	佐久間 覚	玉穂中学校	塚田 博紀
	県教育センター 主幹・指導主事	須田 浩孝	南中学校	萩原 喜成
	山梨大学大学院 教授	松森 靖夫	北東中学校	森 秀昭
	山梨大学大学院 准教授	佐藤 寛之	上野原中学校	中村 宏樹
			櫛形中学校	武持 貴英
			玉幡中学校	小崎由加里
音楽	県教育委員会 指導主事	内田 浩恵	押原中学校	田部 由佳
	県教育センター 副主幹・指導主事	鶴田 心	南中学校	内藤波矢登
	山梨大学大学院 准教授	大内 邦靖	附属小学校	松澤 幸恵
美術	県教育委員会 指導主事	小田切 武	塩山北中学校	小林 直子
	山梨大学大学院 准教授	新野 貴則	田富北小学校	鷹野 晃
			城南中学校	窪田 眞敏
			石和中学校	渡辺 利徳
			泉小学校	佐藤 丈喜
			斐崎西中学校	小俣 直喜
			白根巨摩中学校	塚原 英樹
保体	県教育委員会 指導主事	金井 哲也	附属小学校	山田麻衣子
	県教育委員会 指導主事	桐原 洋	甲西中学校	矢崎 恭央
	山梨大学大学院 教授	木島 章文	長坂中学校	飯塚 誠吾
	山梨大学大学院 准教授	安藤 大輔	山梨南中学校	小沢 隆広
			東中学校	竹中 翼
技術	県教育委員会 指導主事	中島 浩三	斐崎西中学校	進藤 由紀
	県教育センター 主査・指導主事	齊藤 和裕	高根中学校	保坂 恵
	山梨大学大学院 教授	上里 正男	笹南中学校	鈴木 昇
	山梨大学大学院 教授	佐藤 博	下吉田中学校	梶原 将司
			西中学校	西川 卓
			勝沼中学校	内田瑛一郎
家庭	県教育委員会 指導主事	榛原砂穂理	竜王北中学校	保坂 厚雄
	県総合教育センター 主幹・指導主事	赤岡 玲子	忍野中学校	石原 拓馬
	山梨大学大学院 准教授	志村 結美	東中学校	清田 礼子
			春日居中学校	河野美由紀
英語	県教育委員会 指導主事	桑畑 秀子	南西中学校	赤池 朝美
	県教育センター 主査・指導主事	長田 修一	北西中学校	宮崎 茜
	山梨大学大学院 教授	田中 武夫	上条中学校	望月 友紀
			久那土小学校	石原 敬彦
			敷島中学校	立川 武
			城南中学校	本田 恵美
			石和中学校	風間 謙
		浅川中学校	佐藤 愛子	
		北東中学校	上田 浩司	
		附属小学校	赤井 大悟	

資料2) 3年間の実践授業一覧

教科	実施時期	授業者	学年	題材名(単元名)
国語	H26 事前研	富高 勇樹	2年	「ビブリオバトルに挑戦しよう」 ～聞き手を想定し、論理的に話す～
	H26 公開研	保坂 久信	1年	「今、改めて僕から私に伝えたいことをしたためる」 ～語り手に着目し、多角的な読み方をする～
		平井 規夫	3年	芭蕉の俳句の「よさ」を考えよう ～作品の魅力を、自分のことばで表現する～
	H27 事前研	富高 勇樹	3年	私はこう評価する、『高瀬舟』 ～多角的な視点から、作品に対する自分の考えを深める～
	H27 公開研	保坂 久信	2年	「君は『最後の晩餐』を知っているか」のエッセンスを紹介しよう。 ～根拠を明確にして自分の考えをまとめる～
		富高 勇樹	3年	『私』の抱いた「希望」について考える ～作品を読み深め、人間の生き方について自分の考えをもつ～
	H28 事前研	保坂 久信	3年	『握手』の読みどころはどこか ～構成や展開、表現の仕方について評価する～
	H28 公開研	富高 勇樹	1年	『少年の日の思い出』 ～語りに着目して作品を読み深める～
平井 規夫		2年	「スポーツにおけるガッツポーズの是非」について考えを書こう ～自分の立場、伝えたい事実や事柄を客観的に見つめる～	
社会	H26 事前研	佐野 愛	3年	「平等権と共生社会」—在日外国人の参政権をめぐる—
	H26 公開研	田邊 靖博	2年	「関東地方」—圏央道開通から何が見えてくるのか—
	H27 事前研	田邊 靖博	3年	「現在に続く日本と世界」—戦後日本は何をめざし、何を成し遂げ、何が課題となったのか—
	H27 公開研	佐野 愛	1年	「展開する天皇・貴族の政治」—なぜ紫式部は源氏物語を書くことができたのか—
	H28 事前研	佐野 愛	1年	「資源や産業の特色」—日本の漁業は本当に危ないのか—
	H28 公開研	梶原 隆一	1年	「南アメリカ州」—オリンピックとファベラー—
数学	H26 事前研	井上 透	1年	薬師算(文字と式)
	H26 公開研	日向 昭子	2年	スギ花粉の飛散量を予測する方法を考えよう(1次関数)
		櫻井 順矢	3年	落下してくるボールに地面ギリギリでタッチするにはどうすればよいだろうか(関数 $y=ax^2$)
	H27 事前研	櫻井 順矢	1年	自然数の和で等式を作ってみよう(課題学習)
	H27 公開研	日向 昭子	3年	ジェットコースターの速さの変化を調べよう(関数 $y=ax^2$)
		井上 透	2年	赤玉はいくつ入っているのか(確率)
	H28 事前研	佐藤 治彰	2年	奇偶算(課題学習)
	H28 公開研	井上 透	3年	1枚の紙を使って、体積が最大になる直方体を作ろう(課題学習)
日向 昭子		1年	自転車で数学(比例と反比例)	
理科	H26 事前研	萩原 修	3年	「生命の連続性・遺伝の規則性と遺伝子」
	H26 公開研	宮澤 和孝	1年	「身近な物理現象・水の圧力」
	H27 事前研	萩原 修	1年	「物質のすがた・密度」
	H27 公開研	柳澤 真	3年	「仕事とエネルギー・斜面を下る物体の運動」
	H28 事前研	柳澤 真	1年	「物質のすがた・密度」
	H28 公開研	宮澤 和孝	3年	質量の異なる物体の落下速度はどうなるか

音楽	H26 事前研	小林 美佳	3年	5つの音をつかって、言葉にあった旋律をつくろう
	H26 公開研	小林 美佳	3年	歌詞に合わせて旋律をつくろう！
	H27 事前研	小林 美佳	2年	モチーフを変化させて、場面に合った旋律をつくろう
	H27 公開研	小林 美佳	2年	物語をもとにして旋律をつくり、変奏させよう
	H28 事前研	小林 美佳	3年	日本の音楽を、唄と三味線で表現しよう
	H28 公開研	小林 美佳	3年	日本の音楽を、唄と三味線で表現しよう
美術	H26 事前研	小俣 直喜	3年	〇〇な宇宙 ～墨による表現～
	H26 公開研	小俣 直喜	3年	「思い出の桐籠祭」 ～色や形で表そう～
	H27 事前研	小俣 直喜	1年	美術でトーク ～見て、感じて、語ろう～
	H27 公開研	小俣 直喜	1年	自分の見方で ～ゴッホの「星月夜」の鑑賞～
	H28 事前研	松岡あすみ	1年	見るじゃん 山梨 ～山梨の良さを伝えるマークをつくろう～
	H28 公開研	松岡あすみ	1年	記憶に残るデザイン ～伝える内容を印象的に表す～
保体	H26 事前研	秋山 知洋	2年	陸上競技（ハードル走）
	H26 公開研	秋山 知洋	2年	ダンス（現代的なリズムのダンス）
	H27 事前研	秋山 知洋	3年	球技（ネット型 バドミントン）
	H27 公開研	野沢 克美	2年	器械運動（跳び箱運動）
	H28 事前研	野沢 克美	3年	器械運動（マット運動）
	H28 公開研	村松 裕太	2年	武道（柔道）
技術	H26 事前研	山主 公彦	2年	3Dプリンタの加工技術
	H26 公開研	山主 公彦	2年	3Dプリンタの技術を知ろう
	H27 事前研	山主 公彦	2年	3Dプリンタで作ったコマを回そう
	H27 公開研	山主 公彦	2年	3Dプリンタで作ったコマを回そう
	H28 事前研	山主 公彦	2年	3Dプリンタで作ったコマを回そう
	H28 公開研	山主 公彦	2年	3Dプリンタで作ったコマを回そう
家庭	H26 公開研	河野美由紀	1年	住まいの安全 災害への備え
	H27 事前研	山本 裕子	1年	共に住まう～家族みんなで快適な暮らしを～
	H27 公開研	山本 裕子	1年	共に住まう～家族みんなで快適な暮らしを～
	H28 事前研	山本 裕子	2年	地域と世界へ目を向けて
	H28 公開研	山本 裕子	2年	他国の人々に和食料理でおもてなししよう

英語	H26 事前研	野沢喜満子	2年	Homestay in the United States
	H26 公開研	大矢 裕子	1年	ゆるキャラを紹介しよう
	H27 事前研	大矢 裕子	2年	Show and Tell!! ～My Treasure～
	H27 公開研	高杉 廣張	1年	疑問詞を用いて相手のことをよく知ろう
	H28 事前研	関原 寛明	1年	わたしの好きなこと
	H28 公開研	大矢 裕子	3年	情報を加えて相手に伝えよう（後置修飾）

資料3) これまでの研究との関わり

本校の過去10年間の研究を振り返ると、平成17年度から19年度までの研究では、「かかわり」をキーワードに、教材と日常事象とのかかわり、教材の持つ学問の体系的なかかわり、教科独自のアイディア同士のかかわりの3点に焦点をあて、学習内容が頭の中で整理、構造化されて活用できるものとなることをねらった。平成20年度から22年度の研究では、互いに関連づけられてきた知識や概念を社会に「発信」することにより、さらに深化させることを目指した。そのために、自分もっている知識や概念をもう一度見つめ直し、相手や状況によって「再構成」することを研究してきた。平成23年度からの3年間は「自ら問う力を育む」を主題に掲げ、生徒自らが「問い」をもつことを切り口とした。考えるべき視点や方向性のもととなる「問い」を、生徒自らがもつことができれば、自分で課題を解決できる力を生徒が身につけられ、「問い」が生徒の思考力・判断力・表現力等を育むきっかけを生み出すものとなると提案してきた。

「深く考える」授業において、生徒は「自分なりの結論」を吟味し、改善したり、発展させたりする。「視点を変える」活動によって「自分なりの結論」の背景にある知識や情報、価値観に目を向け、それらを再構成していく。これは、これまでの本校の研究でいうところの、「かかわり」を見出したり、「知の再構成」をしたりすることとほぼ同義である。また、生徒がさまざまな「問い」をもつことは、「自分なりの結論」を吟味し、改善したり、発展させたりするために必要なものであると考える。本研究では「視点を変える」活動を意図的に取り入れているが、生徒が「自分なりの結論」を吟味することにつながるには、さまざまな工夫が必要である。その工夫の手がかりは、これまでの研究の成果や課題からも得られるであろう。

生徒が新たな知識や価値を創造していく力を身につけるまでには長い年月が必要であり、それはこの3年間の研究によってのみ達成されるものではない。これまでの研究を生かしながら、「深く考える」授業の創造に粘り強く取り組んでいきたい。

資料4) 各教科の「深く考える」授業の捉え

	「深く考える」授業とは	「深く考える」授業で目指すもの
国語	課題に対して、他者との対話を通して、自他の考えを相互吟味しながら、粘り強く追究していく授業	自分の考えを再構成する（自分の考えを絶対化しないで、考え直すことができる）力の育成
社会	今ある社会の有り様を鵜呑みにしないために、社会の有り様・在り方を多角的・多面的に問う（問い直しや再考も含む）授業	生徒の思考力・判断力・表現力が鍛えられ、社会的な見方や考え方が高まり、最終的には生徒の社会認識が高まること
数学	生徒が到達した「自分なりの結論」（数学科では、生徒が考えた末に得た結論としての意味と、それを得るまでの過程としての意味の2つの側面で捉えている）に満足している状況を打開して、「自分なりの結論」を再評価し、確証を得たり、改善や発展を図ったりする授業	1つのことにこだわりをもち、粘り強く考えることのできる生徒の育成
理科	予想を論理的に精緻化された仮説まで作り上げ、観察・実験結果の解釈から仮説の検証を行い、自然事象を追究していく授業	論理的思考力や判断力・表現力が育まれ、科学的な言葉を使ってわかりやすく説明できるようになること
音楽	人それぞれ違う感性をもつからこそ、自分の思いや意図を伝えたいと考え、どうしたらよいか試行錯誤する。よりよい表現を追い求め、自分の感性を広げていく授業	自分の思いや意図を表現することのできる力の育成
美術	表現及び鑑賞の幅広い活動の中で、よりよいものを追い求める授業	よりよいものをめざして試行錯誤を続ける態度や、知識や技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力の育成
保健体育	生徒が自らの課題解決のために様々な情報を集め、仲間と共に比較・検証、分析をすることで理解を深めながら課題を解決していくプロセスのある授業	授業で学んだ姿勢や態度、課題解決のために思考したり方法を考えたりする力が、日常生活で発揮できる生徒の育成
技術分野	生活や社会において、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性等の視点から技術により解決すべき問題を捉え、その解決に向けて、技術の最適化について考える授業	技術に関わる問題を見出して課題を設定し、解決方法が最適なものとなるように設計・計画し、製作を行い、その解決結果や解決過程を評価・改善する力の育成
家庭分野	学んだ知識や技術をいろいろな角度から考え、その考えた結果を家庭生活で生かすことができる授業	基礎的な知識や技術を身につけるとともに、さらに生活をよりよくする能力と態度の育成
英語	課題に対して、他者との対話を通して、自他の考えを相互吟味しながら、粘り強く追究していく授業	自分の考えを再構成する（自分の考えを絶対化しないで、考え直すことができる）力の育成